

現代日本小説大系（第四十三卷）

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第四十三卷

河出書房版

現代日本小說大系 第四十三卷

昭和二十五年八月二十日 初版發行
昭和二十七年十二月二十日 再版發行

定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

著者代表

川 端 康 成

發行者

河 出 孝 雄

編集者

伊 藤 整

印刷者

土 岐 佐 光

發行所

東京都千代田區株式會社
神田小川町三ノ八

河 出 書 房

電話 神田區三一七四番

目次

川越岡書館

横光利一

日輪	六
蠅	五
静かなる羅列	三
春は馬車に乗つて	古
眼に見えた虱	二
鳥	九
機械	一三

川端康成

伊豆の踊子

三三

十六歳の日記

三六

葬式の名人

一六

母

一七

心中

一五

春景色

一六

抒情歌

二七

禽獣

二五

むすめごころ

三〇

中河與一

氷る舞踏場

二六

肉體の暴風……………二四

満月……………二五

片岡鐵兵

綱の上の少女……………二六

色情文化……………二七

今東光

痩せた花嫁……………二七

池谷信三郎

橋……………二五

解説（伊藤整）……………三五

横光利一

日輪 蠅 静かなる羅列

春は馬車に乗つて

眼に見えた虱 鳥 機械

日輪

序章

乙女達の一團は水甕を頭に載せて、小丘の中腹にある泉の傍から、唄ひながら合歡木の林の中に隠れて行つた。後の泉を包んだ岩の上には、まだ凋れぬ太藺の花が水甕の破片とともに踏みにぢられて残つてゐた。さうして西に傾きかかつた太陽は、この小丘の裾遠く擴つた有明の入江の上に、長く曲折しつゝ迤か水平線の兩端に消え入る白い砂丘の上に今は力なくその光を投げてゐた。乙女達の合唱は華やかな酒樂の歌に變つて來た。さうして、林をぬけると再び、人家を包む圓やかな濃綠色の團塊となつた森の中に吸はれて行つた。眼界の風物、何一つとして動くものは見えなかつた。

そのとき、今迄、泉の上の小丘を蔽つて靜まつてゐた萱の穂波の一點が二つに割れてざわめいた。すると、割れ目は數羽の雉子と隼とを飛び立たせつゝ、次第に泉の方へ眞直ぐに

延びて來た。さうして、間もなく、泉の水面に映つてゐる白茅の一片が裂かれたとき、そこには弦の切れた短弓を握つた一人の若者が立つてゐた。彼の大きく窪んだ眼窩や、その突起した顎や、その影のやうに暗鬱な顔の色には、道に迷うた者の、極度の疲労と饑餓の苦痛が現はれてゐた。彼は這ひながら岩の上に降りて來ると、弓杖ついて崩れた角髪をかき上げながら、渦巻く蔓の刺青を描いた唇を泉につけた。彼の首から垂れ下つた一連の白瑪瑙の勾玉は、音も立てず水に浸つて、靜かに藻を食ふ魚のやうに光つてゐた。

一

太陽は入江の水平線へ朱の一點となつて没していつた。不彌の宮の大殿では、垂木の木舞に吊り下げられた鳥籠の中で、椋鳥が習ひ覺えた卑彌呼の名を一聲呼んで眠りに落ちた。磯からは、満潮のさざめき寄せる波の音が刻々に高まりながら、濱藻の匂ひを籠めた微風に送られて響いて來た。卑彌呼は薄桃色の染衣に身を包んで鑣て彼女の良人となるべき卑狗の大兄と向ひ合ひながら、鹿の毛皮の上で管玉と勾玉とを撰り分けてゐた。卑狗の大兄は、砂濱に輝き始めた漁夫の松明の明りを振り向いて眺めてゐた。

「見よ、大兄、爾の勾玉は亥猪の爪のやうに穢れてゐる。」と卑彌呼は云つて、大兄の勾玉を彼の方へ差し示した。

「やめよ、爾の管玉は病める蠶のやうに曇つてゐる。」

卑彌呼のめでたきまでに玲瓏とした顔は、暫く大兄を睥睨で黙つてゐた。

「大兄、以後我は玉の代りに眞砂を爾に見せるであらう。」

「爾の玉は爾の小指のやうに穢れてゐる。」と、大兄は云ふと、その皮肉な微笑を浮べた顔を、再び砂濱の松明の方へ振り向けた。「見よ、松明は輝き出した。」

「此處を去れ、此處は爾のごとき男の入る可き處ではない。」

「我は歸るであらう。我は爾の管玉を奪へば爾を置いて歸るであらう。」

「我の玉は、爾に穢された吾身のやうに穢れてゐる。行け。」

「待て、爾の玉は爾の靈たまひよりも光つてゐる。玉を與へよ。」

爾は玉を與へると我に云つた。」

「行け。」

卑狗の大兄は笑ひながら、自分の勾玉をさらさらと小壺に入れて立ち上つた。

「今宵は何處で逢はう？」

「行け。」

「丸屋で待たう。」

「行け。」

大兄は遺戸やどの外へ出て行つた。卑彌呼は残つた管玉を引きたれた裳裾ももすその端で掃き散らしながら、彼の方へ走り寄つた。

「大兄、我は高倉の傍で爾を待たう。」

「我はひとり月を待たう。今宵の月は満月である。」

「待て、大兄、我は玉を與へよう。」

「爾の玉は、我に穢された爾のやうに穢れてゐる。」

大兄の哄笑は忍竹を連ねた瑞籬くづきの横で起ると、夕闇の微風に搖れてゐる柏はくの根ねの傍まで續いていつた。卑彌呼は染衣しんいの袖を噛みながら、遠く松の茂みの中へ消えて行く大兄の姿を見詰めてゐた。

二

夜は暗かつた。卑彌呼は鹿の毛皮に身を包んで宮殿からぬけ出ると、高倉の薬戸やくどに添つて大兄を待つた。栗風は頭の上で、栗の梢の枝を撓なめて音を立てた。

「大兄。」

野兎いは菴麻いんまの茂みの中で、晝に狙はれた青鷹の夢を見た。さうして、彼は飛び跳ねると、菴麻の幹に突きあたりながら、零餘子ひかりごの葉叢の中へ馳け込んだ。

「大兄。」

梟きようは木樓樹もろうじゆの梢を降りて來た。そして、嫁菜よめなを踏みながら群むらの意匠いさぎの下を潜つて青蛙に飛びついた。

「大兄。」

併し、卑狗の大兄はまだ來なかつた。卑彌呼は薬戸の下へ

蹲居ると、ひとり菰を引いては投げ引いては投げた。月は高倉の千木を浮かべて現れた。森の柏の静まつた葉波は一齊に濡れた銀の鱗のやうに輝き出した。そのとき、軽い口笛が草玉の茂みの上から聞えて來た。卑彌呼は蘆戸から身を起すと、草玉の穂波の上に半身を浮かべて立つてゐる卑狗の大兄の方へ歩いていった。

「大兄、大兄。」彼女は鹿の毛皮を後に跳ねて彼の方へちか寄つた。「夜は間もなく明けるであらう。」

併し、大兄は輝く月から眼を放さずに立つてゐた。

「大兄よ、我は管玉を持つて來た。爾は受けよ。」と、卑彌呼は云つて玉を大兄の前へ差し出した。

「爾は何故にここへ來た？ 我はひとり月を眺めにここへ來た。」

「我は爾に玉を與へにここへ來た。受けよ、我は玉を與へると爾に云つた。」

大兄は卑彌呼の管玉を攫んでとつた。

「我は爾に逢はんがためにここへ來た。爾は我に玉を與へにここへ來た。爾は歸れ。」

と大兄は云つて再び空の月へ眼を向けた。

卑彌呼は黙つて草玉の實をしごき取ると大兄の横顔へ投げつけた。大兄は笑ひながら急に卑彌呼の方へ振り向いた。さうして、彼女の肩へ兩手をかけて、抱き寄せようとする、

彼女は大兄の胸を突いて身を放した。

「我は歸るであらう。我は爾に玉を與へた。我は歸るであらう。」

「よし、爾は歸れ、爾は歸れ。」と、大兄は云ひながら、彼女の振り放さうとする兩手を持つた。さうして、彼女を引き寄せた。

「放せ、放せ。」

「歸れ、歸れ。」

大兄は漢痒く卑彌呼を横に輕輕と抱き上げると、どつと草玉の中へ身を落とした。さらさらと揺らめいた草玉は、その實を擦つて二人の上で鳴つてゐた。

「卑彌呼、見よ、爾は彼方の月のやうに美しい。」

彼女は大兄の腕の中に抱かれたまま、今は靜に眼を瞑ぢて彼の胸の上へ頬をつけた。

「卑彌呼、もし爾が我が子を産めば姫を産め。我は爾のごとき姫を欲する。もし爾が彦を産めば、我のごとき彦を産め。我は爾を愛してゐる。爾は我を愛するか。」

しかし、卑彌呼は大兄を見上げて黙つたまま片手で彼の頬を撫でてゐた。

「ああ、爾は月のやうに黙つてゐる。冷たき月は缺けるであらう。爾は歸れ。」

大兄は卑彌呼を揺つて睥まへた。が彼女は微笑しながら靜

に大兄の顔を見上げて黙つてゐた。

「歸れ、歸れ。」

と大兄は云ひつつ、彼女を抱いた兩腕に力を籠めた。卑彌呼は大兄の首へ手を卷いた。さうして、二人は黙つてゐた。

月は青い光りを二人の上へ投げながら、彼方の森からだんだん高く昇つていつた。そのとき、一人の瘦せた若者が、生薑を噛みつつ木樓樹の下へ現れた。彼は破れた軽い麻鞋を、水に浸つた俵のやうに重重しく運びながら、次第に草玉の茂みの方へちか寄つて來た。卑狗の大兄は足音を聞くと立ち上つた。

「爾は誰か。」

若者は立停ると、生薑を投げ捨てた手で劍の頭椎を握つて黙つてゐた。

「爾は誰か。」と再び大兄は云つた。

「我は路に迷へる者。」

「爾は何處の者か。」

「我は旅の者、我に糧を與へよ。我は爾に劍と勾玉とを與へるであらう。」

大兄は卑彌呼の方を振り向いて彼女に云つた。

「爾の早き夜は不吉である。」

「大兄、旅の者に食を與へよ。」

「爾は彼を伴なうて、食を與へよ。」

「良きか、旅の者は病者のやうに瘦せてゐる。」

大兄は黙つて若者の顔を眺めた。

「大兄、爾はここにゐて、我を待て、我は彼を營殿へ伴なはう。」卑彌呼は毛皮を被つて若者の方を振り向いた。「我に従つて爾は來れ。我は爾に食を與へよう。」

「卑彌呼、我は最早や月を見た。我はひとり歸るであらう。」

大兄は彼女を睥んで云つた。

「待て、大兄、我は直ちに歸るであらう。」

「行け。」

「大兄よ、爾は我に代つて彼を伴なへ、我はここで爾を待たう。」

「行け、行け、我は爾を待つてゐる。」

「良きか。」

「良し。」

「來れ。」と卑彌呼は若者に再び云つた。

若者は、月の光りに咲き出た夜の花のやうな卑彌呼の姿を、茫然として眺めてゐた。彼女は大兄に微笑を與へると、先に立つて宮殿の身屋の方へ歩いていつた。若者は漸く麻鞋を動かした。さうして、彼女の影を踏みながらその後から従つた。大兄の顔は顰んで來た。彼は小石を拾ふと森の中へ投げ込んだ。森は數枚の柏の葉から月光を拂ひ落して呟いた。

三

身屋の賛殿の二つの隅には松明が燃えてゐた。一人の膳夫は松明の焰の上で、鹿の骨を焙りながら明日の運命を占つてゐた。彼の恐怖を浮べた赭い横顔は、立ち昇る煙を見詰めるがらだんだんと悦びの色に破れて來た。そのとき、入口の戸が押し開けられて、後に一人の若者を従へた王女卑彌呼が這入つて來た。膳夫は振り向くと、火のついた鹿の骨を握つたまま眞菰の上へ跪拜した。卑彌呼は後の若者を指差して膳夫に云つた。

「彼は路に迷へる旅の者、彼に爾は食を與へよ。彼のために爾は臥所を作れ。」

「酒は？」

「與へよ。」

「粟は？」

「與へよ。」

卑彌呼は若者の方を振り向いて彼に云つた。

「我は爾を残して行くであらう。爾は爾の欲する物を彼に命じよ。」

卑彌呼は臂に飾つた釧の碧玉を松明に輝かせながら、再び戸の外へ出て行つた。若者は眞菰の上に突き立つたまま、その落ち窪んだ眼を光らせて彼女の去つた戸の外を見つめてゐた。

た。

「旅の者よ。」と、膳夫の聲が横でした。

若者は膳夫の顔へ眼を向けた。さうして、彼の指差してゐる下を見た。そこには、海水を湛へた盥の中に海螺と山蛤が浸してあつた。

「彼の女は何者か。」

「此の宮の姫、卑彌呼と云ふ。」

膳夫は彼の傍から隣室の方へ下がつていつた。鑪で、數種の行器が若者の前に運ばれた。その中には、野老と蘿蔔と朱實と粟とがはいつてゐた。櫨の木の中から製した醃の酒は、その傍の酒瓮の中で、薫ばしい香氣を立ててまだ波波と揺らいでゐた。若者は片手で粟を摘むと、「卑彌呼」と一言呟いた。

そのとき、君長の面前から下つて來た一人の宿禰が、八尋殿を通じて賛殿の方へ來た。彼は痼疾の中風症に震へる老軀を數人の使部に護られて、若者の傍まで來ると立停つた。

「爾は何處の者か。」

宿禰の垂れ下つた白い眉毛は、若者を見詰めてゐる眼の上で慄へてゐた。

「我は路に迷へる旅の者。」

「爾の額の刺青は玩である。爾は奴國の者であらう。」
「否。」

「爾の頸の刺青は月である。爾は奴國の貴族であらう。」

「否。」

「爾の唇の刺青は蔓である。爾は奴國の王子であらう。」

「否、我は路に迷へる旅の者。」

「やめよ。爾の祖父は不彌の王母を掠奪した。爾の父は不彌の靈床に火を放った。彼を殺せ。」

宿禰の茨の根で作った杖は若者の方へ差し向けられた。忽ち、使部達の劍は輝いた。若者は突つ立ち上ると、掴んだ粟を眞先に肉迫する使部の面部へ投げつけた。劍を抜いた。と見る間に、使部の片手は劍を握つたまま胸を放れて酒の中へ落ち込んだ。使部達は立ち停つた。若者は飛び退くと、杉戸を脊にして突き立つた。彼を目がけて鎧が飛んだ。行器が飛んだ。覆つた酒瓮から酒が流れた。さうして、海螺や朱實が立ち籠めた酒氣の中を杉戸に當つて散亂すると、再び數本の劍は一齊に若者の胸を狙つて進んで來た。身屋の外では法螺が鳴つた。若者は劍を舞はせて使部達の劍の中へ馳け込んだ。さうして、その背後で痼疾に震へてゐる宿禰の上へ飛びかかると、彼を眞菰の上へ押しつけた。使部達の劍は再び彼に襲つて來た。彼は宿禰の胸へその劍の尖をさし向けると彼らに云つた。

「我を殺せ、我的劍も動くであらう。」

使部達は若者を包んだまま動くことが出来なかつた。宿禰

は若者の膝の下で、なほその老軀を震はせながら彼らに云つた。

「我を捨てよ。彼を刺せ。不彌のために奴國の王子を刺し殺せ。」

併し、使部達の劍は振り上つたまま下らなかつた。法螺はただ一つますます高く月の下を鳴り續けた。銅羅が鳴つた。兵士達の銅鉦を叩いて馳せ寄る響が、武器庫の方へ押し寄せ、更に贊殿へ向つて雪崩れて來た。

「奴國の者が宮に這入つた。」

「姫を奪ひに。」

「鏡を掠りに。」

騒ぎは人人の口から耳へ、耳から口へと靜まつた身屋を包んで波紋のやうに擴がつた。やがて、贊殿の内外は、兵士達の鉦尖のために明るくなつた。

「奴國の者は何處へ行つた。」

「奴國の者を外へ出せ。」

贊殿の入口は動亂する兵士達の肩口で押し破られた。そのとき、彼らの間を分けて、一人卑彌呼が進んで來た。兵士達は争つて彼女の前に道を開いた。彼女は贊殿の中へ這入ると、使部達の劍に包まれた若者の姿を眼にとめた。

「待て、彼は道に迷ひし旅の者。」

「彼は奴國の王子である。」

「彼は私の伴なひし者。」

「彼の祖父は不彌の王母を掠奪した。」

「劍を下げよ。」

「彼の父は不彌の神庫に火を放った。」

卑彌呼は使部達の劍の下を通つて、若者の傍に出た。

「私は爾に食を與へた。爾は爾の國へ直ちに歸れ。」

若者は踏み敷いた宿禰を捨てて劍を投げた。さうして、卑彌呼の前に跪拜くと、彼は崩れた角髪の下から眼を光らせて

彼女に云つた。

「姫よ、我を爾の傍におけ、我は爾の下僕にならう。」

「爾は歸れ。」

「姫よ、我は爾に、私の骨を捧げよう。」

「去れ。」

「姫よ。」

「彼を出せ。」

使部達は劍を下げて若者の腕を握つた。さうして、彼を戸外の月の光りの下へ引き出すと、若者は彼らを突き伏せて再び賛殿の中へ馳け込んだ。

「姫よ。」

「去れ。」

「姫よ。」

「去れ。」

「爾は我が命を奪ふであらう。」

忽ち、兵士達の鋒尖は、勾玉の垂れた若者の胸へ向つて押し寄せた。若者は鋒尖の映つた銀色の眼で卑彌呼を見詰めるが、再び戸外へ退けられた。さうして彼は數人の兵士に守られつつ、月の光りに静まつた萩と紫苑の花壇を通り、紫竹の茂つた玉垣の間を白洲へぬけて、磯まで來ると、兵士達の嘲笑とともに鞭と濱藻の上へ投げ出された。一連の波が襲つて來た。さうして、彼の頭の上を乗り越えて消えて行くと、彼は漸く半身を起して宮殿の方を見續けた。

四

「王子は歸つた。」

「呪禁師の言はあたつた。」

「峠を越えて。」

「矛木のやうに瘦せて歸つた。」

奴國の宮は、山の麓の篠屋の中から騒ぎ始めた。さうして、この騒ぎは宮を横切つて、宮殿の中へ這入つて行くと、夜になつて、神庫の前の庭園で盛大な饗宴となつて變つて來た。

松明を咬んだ火串は圓形にその草野を包んで立てられた。集つた宮人達には、鹿の肉片と、松葉で造つた麴酒や醗の酒が配られ、大夫や使部には、和稻から作つた諸白酒が與へら

れた。さうして、宮の婦女達は彼らの前で、まだ花咲かぬ忍冬を頭に巻いた鉦女となつて、酒樂の唄を謡ひながら踊り始めた。數人の若者からなる樂人は、槽や土器を叩きつつ二絃の琴に調子を打つた。

肥え太つた奴國の宮の君長は、童男と三人の宿禰とを從へて槽の上で、瘦せ細つた王子の長羅と並んでゐた。長羅は過ぎた狩獵の日、行衛不明となつて奴國の宮を騒がせた。彼は十數日の間深い山を廻つてゐた。さうして、彼は不彌へ出た。曾てあの不彌の宮で、生命を斷たれようとした若者は彼であつた。

「長羅よ、見よ奴國の女は美しい。」

と君長は云つて踊る婦女達を指差した。

「我は爾に妻を與へよう。爾は爾の好む女を捜せ。」

長羅の父の君長は、妃を失つて以來、饗宴を催すことが最大の慰藉であつた。何ぜなら、それは彼の面前で踊る婦女達の間から、彼は彼の欲する淫蕩な一夜の肉體を選択するに自由であつたから。さうして、彼は、回を重ねるに従つて常に一夜の肉體を捜し得た。今又彼は、槽の上から二人の婦女に眼をつけた。

「見よ、長羅、彼方の女の踊りは見事であらう。」

長羅の細まつた憂鬱な眼は、踊りを外れて森の方を眺めてゐた。君長は空虚の酒盃を持つたまま、忙しさに踊りの

中へ眼を走らせながら、再び一人の婦女を指差して云つた。「彼方の女は子を産む猪のやうに太つてゐる。見よ、長羅、彼方の女は子を胎んだ冬の狐のやうに太つてゐる。」

饗宴は酒甕から酒の減るにつれて亂れて來た。鹿は酔ひ潰れた若者達の間を漫步しながら酢漿草の葉を食べた。やがて、一團の若者達は裸體となつて、櫛の枝を振りながら婦女達の踊りの中へ流れ込んだ。このとき、人波の中から、絶えず槽の上の長羅の顔を見詰めてゐる女が二人あつた。一人は踊りの中で、君長の視線の的となつてゐた濃艶な若い大夫の妻であつた。一人は松明の明りの下で、兄の詞和郎と並んで立つてゐる兵部の宿禰の娘、香取であつた。彼女は奴國の宮の乙女達の中では、その美しい氣品の高さに於て巔然として優れてゐた。

「ああ長羅、見よ、彼方に爾の妻がゐる。」と、君長は云つて長羅の肩を叩きながら、香取の方を指差した。

香取の氣高き顔は松明の下で、淡紅の朝顔のやうに赧らんで俯向いた。

「王子よ、私の酒盞を爾は受けよ。」と、兵部の宿禰は傍から云つて、馬爪で作つた酒盞を長羅の方へ差し延べた。何ぜなら、彼の胸中に長く潜まつてゐた最大の希望は、今漸く君長の唇から、流れ出たのであつたから。

併し、長羅の頭首は重く黙つて横に振られた。彼の眼の向

けられた彼方では、松明の一塊が火串の藤蔓を焼き切つて、赤赤と草の上へ崩れ落ちた。一疋の鹿は飛び上つた。さうして、踊の中へ角を傾けて馳け込んだ。

「父よ、我は臥所を欲する。我を赦せ。」

長羅はひとり立ち上つて櫓を降りた。彼は人波の後をぬけ、舳庫の前を通つて暗い櫓の下まで來かかつた。そのとき、踊りの群から脱け出した一人の女が、彼の後から馳けて來た。彼女は大夫の若い妻であつた。

「待て、王子よ。」と彼女は云つた。

長羅は立ち停つて後を向いた。

「我は爾の歸るを、月と星とに祈つてゐた。」

長羅は黙つて再び母屋の方へ歩いていつた。

「待て、王子よ。我は夜の來る度に爾の夢を見た。」

併し、長羅の足はとまらなかつた。

「ああ、王子よ。爾は我に言葉をかけよ。爾は我を森へ伴なへ。我は我の祈りのために、再び爾を櫓の上で見た。」

そのとき、二人の後から一人の足音が馳けて來た。それは女の良人の瘦せ細つた若い大夫であつた。彼は蒼ざめた顔をして慄へながら長羅に云つた。

「王子よ、女は我の妻である。願はくば妻を斬れ。」

長羅は黙つて母屋の階段に足をかけた。大夫の妻は長羅の腕を握つてひきとめた。

「王子よ。我と伴なへ、我は今宵とともに死ぬるであらう。」
大夫は妻の首を掴んで引き戻さうとした。

「爾は我を欺いた。爾は狂つた。」

「放せ、我は爾の妻ではない。」

「ああ、妻よ、爾は、我を欺いた。」

大夫は妻の髪を掴んで引き伏せようとしたときに、再び新しい一人の足音が、踰越めきながら三人の方へ馳けて來た。それは酒盞を片手に持つた長羅の父の君長であつた。彼は踏み込ると土を片頬に塗りつけて起き上つた。

「女よ、我は爾を捜してゐる。爾の踊りは何者よりも見事であつた。來れ。我は今宵爾に、奴國の宮を與へよう。」

君長は女の腕を握つて階段を昇つていつた。大夫は女の後から馳け登ると、再び妻の手を持つた。

「王よ、女は我の妻である。妻を赦せ。」

「爾の妻か。良し。」

君長は女を放して劍を抜いた。大夫の首は、地に落ちた。續いて胴が高縁に倒れると、杉柵の中に靜まつてゐる自分の首を覗いて動かなかつた。

「來れ。」と君長は女に云つてその手を持つた。

「王子よ、王子よ、我を救へ。」

「來れ。」

女は君長を突き跳ねた。君長は大夫の胴の上へ仰向きに倒